

学校だより

さくらっ子

四日市市立桜小学校

平成 30 年 9 月 20 日

第 16 号



全国学力・学習状況調査の結果から①

6 年生が 4 月に実施した全国学力・学習状況調査の結果が届きました。調査から測定できるのは、子どもの学力の一部であり、学校の教育活動の一側面ではありますが、結果をもとに学校、家庭が協力して、教育活動や児童の学習環境の改善につなぐことが大切であると考えます。

今回の結果から見えてきた本校の「強み」「弱み」についてまとめてみました。



① 国語

- A問題（基本）の本校の平均正答率は 70%でした。これは、県平均と同じで、全国平均より 0.7 ポイント下回りました。
 - ・ 「話す・聞く（能力）」領域が、県、国と比較して大きく上回っています。
 - ・ 「目的に応じて伝えたいことについて筋道を立てて話す」「適切な敬語の使い方」などを問う問題がよくできました。また、漢字を文の中で正しく使うこともよくできました。
 - ・ 一方で、「書く」「読む」領域が、残念ながら県、国と比較して大きく下回っています。
 - ・ 「情景描写をもとに人物の心情を捉える」「主語と述語の関係に注意して書く」などの項目で課題が残りました。
- B問題（応用）の本校の平均正答率は 55%でした。これは、県平均より 1 ポイント、全国平均より 0.3 ポイント上回りました。
 - ・ 「読む」領域が、A 問題とは異なり、県、国より大きく上回っています。「目的に応じて本を進んで読む」「自分の考えを明確にしながら読む」ことがよくできました。
- 国語科において、本校児童は、話したり聞いたりすることを得意とし、読む力はあるものの、読み取ったことを書き表すことを苦手とする傾向がみられることがわかりました。

② 算数

- A問題（基本）の本校の平均正答率は 65%でした。県、全国平均よりもそれぞれ 2 ポイント、1.5 ポイント上回りました。
 - ・ 「数と計算」「図形」「数量関係」領域は、県、全国平均より上回りました。
 - ・ 「数量関係を数直線上に表す」「小数の除法の意味を理解する」などがよくできました。
- B問題（応用）の本校の平均正答率は 50%でした。これは、県平均と同じで、全国平均より 1.5 ポイント下回りました。
 - ・ 「棒グラフや帯グラフを読み取り、適切に判断する」項目に課題が残りました。
- 算数科において、本校児童は、基礎的な力は身につけているが、基礎的な力を適切に活用することが苦手であるといえます。パターン化された問題を得意とするが、条件が変わったり処理が 2 段階になったりする問題では正答率が下がってしまう傾向があることがわかりました。

③ 理科

- 本校の平均正答率は 60%でした。県平均より 1 ポイント上回り、全国平均より 0.3 ポイント下回りました。
 - ・ 「知識・理解」に関する問題の正答率が高く、基本的な理科用語は定着しています。
 - ・ 実験を通して導き出した結論を書くなどの記述問題で無解答率が低く、最後まで解こうとする意欲が途切れない児童が多いことがわかります。
 - ・ 実験結果はよく覚えているが、その理由を書くことができない児童が多いことが課題です。

本校では、子どもたち一人一人が安心して学習できるように、学習規律や環境づくりに力を入れています。45 分授業を確保し、授業開始・終了の号令をきちんとそろえ、先生や友だちの話を聞くことを大切にしています。そして、ユニバーサル・デザインを取り入れた「わかる」授業の展開によって、基礎基本の定着を図っています。

今回の結果を踏まえて、今後の学習の取り組みの重点について、裏面で紹介します。



これからの学習はこうします！～学年の実態に応じた取り組みを積み上げる～

① 読書の時間

- 本校が以前から取り組んでいる「朝の読書の時間」を継続し、図書ボランティアの皆さんや図書館司書による読み聞かせやブックトークなどの活動をさらに充実します。

② 基礎学力の定着

- 「朝の読書の時間」に加えて「朝の学習の時間」を設けます。繰り返し学習により、応用問題に取り組むための基礎となる学力の定着を図ります。
- 「朝の学習の時間」では、視写を取り入れて名文に触れる機会とする等、学年の実態に応じた効果的な短時間学習となるように工夫します。

③ 授業改善

- 国語科では、字数制限を意識して文章にまとめたり、友だちの発言内容をしっかり聴いて書いたりする活動を通して、「書く」力の育成を図ります。
- 算数科では、様々なパターンの文章問題に出合わせたり、論理的に考える場を設けたりして、文章問題に慣れ親しませるようにします。
- 既習内容を定着させるために、視覚的效果のある教具を用いるなどの工夫をしながら、授業時間内に復習するようにします。
- 新聞など多様な資料を活用した学習を行うことで、読解力や表現力など言語に関する能力の向上を図ります。

④ 家庭学習

- 家庭学習が習慣づくように「家庭学習の手引」の活用を呼びかけ、家庭と学校の協力体制を確立します。今、わかることとわからないことをはっきりさせて、わからないことを解き直したり聞いたりして解決していきましょう。
- しっかり食べ、しっかり眠り、自分の力を発揮できるようにしましょう。



外国語(英語)教育を進めています！

学校だより第3号でもお知らせしましたが、新学習指導要領の「移行期」となる本年度は、指導の要となる英語専科教員が学級担任や英語指導助手とともに英語教育に取り組んでいます。

右の写真は、9月18日(火)に行われた6年1組の英語の授業の様子です。夏休みの思い出について、簡単な語句や基本的な表現を用いて友だちと伝え合う活動をしているところです。

I went to ～. I enjoyed ～. など、過去を表す表現に気づくこともこの学習のめあての1つです。子どもたちは、積極的に話し相手を探して教室内を移動し、これまでの学習の成果を活かして、英語による会話を楽しんでいます。

また、下の写真は、ハッキーム先生にかわって英語を教えていただく英語指導助手(ALT)のマリナ先生の9月13日(木)の授業の様子です。マリナ先生は、授業の中で、母国ラトビアに関する写真を見せながら英語で自己紹介をされました。子どもたちの表情は笑顔に満ちて、ハッキーム先生同様、すぐにマリナ先生に親しみを感じている様子でした。授業を終えたマリナ先生も「楽しかった」とさくらっ子との出会いを喜んでいました。

ところで、先日、あるテレビ番組で、日本人と英語教育に関する興味深い話を聞きました。その方は外国語大学の教授で、若い頃に留学した日本に強い憧れを感じ、以来48年間も日本で暮らし続けるアメリカ人のジェフさんです。

ジェフさんは、「一を聞いて十を知る」日本人を聞き手としては世界一コミュニケーションの上手な国民と言います。そのあり方を「受信者責任型」コミュニケーションと呼び、英語を学ぶならば、欧米人がもつ「発信者責任型」の心構えが必要だと力説します。

間違えたら「恥ずかしい」という気持ちを横に置き、体を大きく見せて大きな声を出し、大げさな表情で相手に自分の思いを伝えようとする心構えが、英語の上達には欠かせないそうです。

